



1998 年 (平成 10 年)
8 月号 (No.639)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

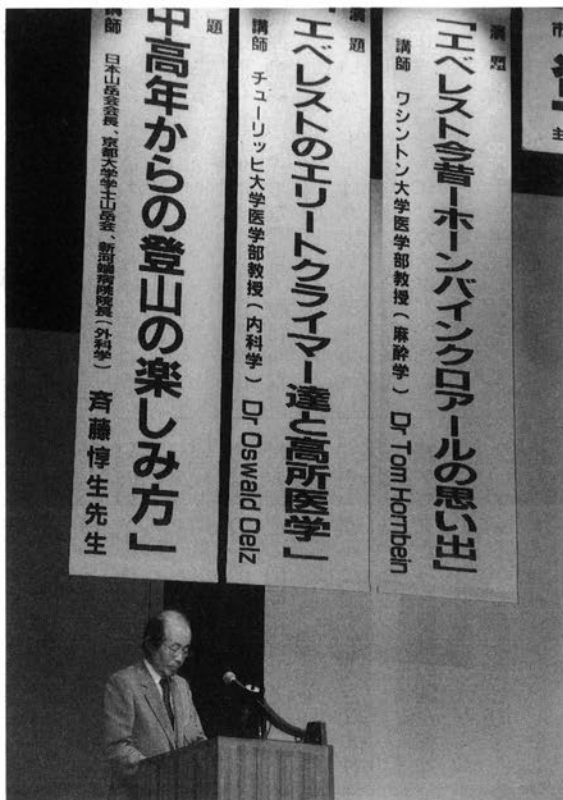
目次

登山と高所環境に関する国際医学会議 —松本市で開催—	1
報告	
集会委・若葉会山行 虎毛山	4
三水会・初の海外登山	4
自然学研・やま学研活動報告	5
支部だより	6
岐阜支部・チョモランマBC探訪	6
海外の山	7
わが支部とおきの一山	
信濃支部・天狗岩	8
福岡支部・竜良山 白岳 御岳	9
東西南北	
山書の重み	10
「樹林の山旅」再考	10
俳句六月 針ノ木雪溪をゆく	11
赤シャツ土曜会新発足	11
高山植物盗掘のプロも登壇	11
福田宏年さんを語る会	12
芦生の森を歩く・その3	12
図書紹介	14
さんけんだより	15
図書受入報告	15
ネパール国際山岳博物館募金状況	16
新入(復活)会員	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20時
月・金曜日 13~20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13~20時

登山と高所環境に関する 国際医学会議 — 松本市で開催

医療委員会理事 増山 茂



松本市の市民公開講座で講演する斎藤会長

「登山と高所環境に関する国際医学会議」(会長・中島道郎)が本年五月二十日から二十六日まで松本市で開催された。日本登山医学研究会(会長・小林俊夫)と国際登山医学会(会長・P・ベルチェ)が共催するもので、海外三十二カ国から百三十人、発表演題百五十題、日本から三百人、演題百題。市民公開講座には約千人、湊沢・穂高での救助のデモにも多数が参加した。

■会議の沿革

この領域の世界会議は、一九七九年カナダのバンフに始まる世界低酸素会議をもって嚆矢とする。一九七八年、メスナーの無酸素エベレスト登頂が世界中の低酸素や低圧、低温に興味を持つ生理学者を刺激したのである。以後、高山での医学調査実験隊、長期低圧室滞在実験、研究室での動物モデル実験、細胞や分子レ

ベルでの実験などを通じて、マイナス四〇度C、三分の一気圧下での運動中に生体は何が起こっているかを理論的実証的に説明する試みがこの会議で報告され、検討されてきた。二年に一度西暦奇数年にカナダのロッキーマウンテンで開かれてきたこの世界低酸素会議(一九九七年で第十回を迎えた)は、世界中のこの領域の医学者・研究者が一堂に会する掛け値なしに最高級の会議である。

一方、欧州には欧州の立場がある。米国の学問的に過ぎる関心の持ちようになや批判的であり、近代アルピニズムの指導者はこちらとの自負もある。一九八四年以降、欧州勢は国際山岳連盟の医療委員会を基盤に、国際登山医学会を結成する。中心はスイス・オーストリア勢である。登山のベテランの経験と知恵を普遍化しようというわけで、キーワードは

「登山の医学」。当初は欧州中心に会議をもっていたが、西暦遇数年には世界各地をまわろうと、国際登山医学会議が企画される。松本会議はラパス、クスコに次ぐ第三回となるわけである。

実際は世界低酸素会議も国際登山医学会議も、主要な登場人物は重なっている。開催場所日時をすりあわせている。来年はカナダのジャスパーで世界低酸素会議、二〇〇〇年はチリ、二〇〇一年はカナダ、二〇〇三年はイタリアと決まっているし、中国、インドも手を挙げている。

この両者が手を携えて三十年、急性高山病の新しい定義や評価法、



左からエルツ(ス)、ベルチェ(独)、ウェスト(米)、ハケット(米)各氏

治療予防のアウトライン、高所トレーニングのあり方、レスキューシテムの構築など、実践的な面でも世界的標準を提唱してきた。二十年前にはベテランの頭の中だけにあった経験と知恵が体系的な知識になったのはこの一連の会議のお陰である。

世界中どの山域に行っても、どの国の人と話しても、急性高山病の考え方や治療法に関する大きなすれ違いはなくなった。

■アジアからも多数の国が参加

さて日本である。欧米から常連がやってくるが、日本としてはどちらにも与するつもりはない。キーワードは「アジア」である。

今回われわれが腐心したのは、いままでは単に調査対象や声なき協力者としてしか見られなかった人々に参加を促すことであった。ケチュア族やアイマラ族は、「中枢神経失調」が慢性高山病をもつ高地居住民に普遍的な症状である、との欧米学者による記載に同意したわけではなからう。シェルパは、輝かしい登山成果を誇る欧米の一部登山家の背後にある生理的実態について、永遠に口を閉ざしたままではいるはずがない。高地居住民といっても私たちとかけ離れた存在ではない。酸素が少なく、という点だけでとても厳しい条件に人々は住む。登山やトレッキング

などを通じ、彼らの伝統的な社会的経済的基盤に外的圧力を加えてきたわれわれは、彼らの変化のありようを謙虚に聴く義務があらう。

「長期間の低酸素の影響」や「世界の高地居住民」などのセッションを特設したのはこのためであった。

高地居住民をもつほとんどすべての地域(ブータン、ネパール、ラダック、フンザ、チベット、キルギス、カザフ、チリ、ペルー、ボリビア、エチオピア、米国)から参加者を得た。彼らの素朴な、しかし現実に根を張った報告には、すれっからしの欧米科学者の目を見張らせるものもあった。

スロベニア、ウクライナ、スウェーデン、ポーランド、ガーナ、イスラエル、エジプト、エクアドル、イラン、韓国、台湾などといった低酸素や登山医学の世界では珍しいところからも参加者を得た。初めて本当の意味で「国際的」な会議になった、と大方の欧米研究者が驚いた。これから多くの方々に助けられ、今回の会議では世界各地で解釈が混乱していた(とくに南米とアジアで考え方が大きく異なっていた)「慢性高山病」に新しい概念と定義を提唱することができた。この松本合意がこれ以後の国際会議での討議の前提となるであらう。

■高山病の標準的対処法の確立

登山の医学は医学者、生理学者と登山家との共同作業で作上げられてきた。以前はベテランの経験の中に封じ込められてきたこれらの知識、今では誰にでも理解できるように標準化がすすめられている。一九九三年レーククルーズでは曖昧だった「急性高山病」をはっきり定義し、その重症度分類を定量化した。同年、国際山岳連盟の医療委員会はこの急性高山病の標準的対処法を勧告している。現在では世界中の登山隊、トレッキング隊はこの二つの指針をほぼ受け入れている。

わが国はというと、かなりのレベルの登山家、あるいは医師でも依然としてベテランの知恵に重きを置く傾向がある。欧米に追従する必要は毛頭ないが、世界の趨勢を無視するためにはよほど独自の研究が必要ではなくである。

今回用意した「トレッキング・遠征登山のための医学講座」は高度馴化の方法(ベルグホルト)、低体温症への処置(デューラー)、フィードでの鎮痛麻酔(ウイゲット)など、実践に関わる国際山岳連盟の世界標準処方といえる。標準とはいえず、デキサメサゾンの使い方、ケタミンの使用の是非などに英国と欧州大陸の違いが浮かび出たのは面白かった。

■高所トレーニングと運動能力
マラソンランナーの浅利純子さんが晩餐会に飛び入りで参加してくれた。アトラクタ五輪はシューズのトラブルで好成績を上げられなかったが、コロラドでの高地トレーニングで実力をつけたことはよく知られている。高地トレーニングも今回の話題の一つであった。浅利さんが所属するクラブの医学アドバイザーが組織したセッションは、皮肉にも高地トレーニングが平地での持久力に及ぼす正の効果を証明できなかった。

(A)高地(二七〇〇メートル)で睡眠をとり高地でトレーニングをする選手群。(B)高地で睡眠をとり低所でトレーニングする選手群。(C)低所で睡眠をとり低所でトレーニングする選手群。



瀧沢のデモに参加したホーンバイン氏(中央白い帽子)

眠をとり低所でトレーニングする選手群。この中で最もよい成績を残したのは(B)の群であった。これは“Steeper, exercise-low”説を初めて実証したものである。もっともこれは体協には困ったことかもしれないが、山岳界にとってはどうという話ではない。高所で睡眠をとり、高所でトレーニングするとその高度での運動能力は改善されるという証拠は数かぎりなくあるのだから。

■長野県警が瀧沢で救助訓練デモ

山岳救助セッション。欧米亜九カ国からの報告があった。アルプスやピレネーで怪我をしたとしてみよう。あつという間にヘリが飛んでくる。そのスピードと技術を彼らは競っている。各国で経済的基盤は違うようだが(フランスは国や地方自治体機関として山岳救助を行っている。スイスはREGA、イタリア、オーストリアは各国山岳会経由の保険加入)、共通するのは登山は観光産業であり、救助システムはそのインフラの一つという考え方である。担当する救助士、医師の意識も違う。

長野県警、文部省登山研修所など日本からの報告も注目を浴びた。日本でも自治体、警察、山岳ガイド、山小屋、医療機関、山岳団体などを結び付けるシステムそのものとして語られねばなるまい。

ネパールのヒマラヤ救助協会、パキスタンのカラコルム救助協会など、大きな山城をカバーする国際的組織から支援を期待する発表もあった。国際山岳連盟は、山岳救助部門だけは国際山岳救助連盟(IKAR)にその国際的取りまとめを委ねている。日本の救助関係者もIKARとの接触も含めて国際的視野を持つべきであろう。

本会議終了後、瀧沢において長野県警山岳救助隊による山岳救助訓練の供覧を含めた山岳救助の特別セミナーが行われた。翌日は残雪の奥穂に登頂し、日本アルプスを楽しんだ。

■盛会だった市民講座

松本市民に向けた公開講座も行われた。今回はエベレストシリーズ。高山病で有名なP・ハケット博士、メスナーと行をともししたO・エルツ博士、北壁にその名前を残すTF・ホーンバイン、日本からは田部井淳子さんと日本山岳会の斎藤厚生会長。千人が名調子を楽しんだ。

ほとんどすべてのセッションに日英の同時通訳を用いた。熱気あるたくさんの日本人の発表に外国からの参加者も驚いていた。

■Eメールで検討も

多くの海外の方々と日々連絡を取りつつ国際会議の準備は行われるものだが、今回はインターネットとE

メールにずいぶん助けられた。プログラムや抄録を含む会議の情報は刻々とインターネット上のホームページに公開され、質疑応答もこの上で行われた。いくつかの学術的セッションでは事前にシンポジストの間でEメール上の討論が行われ、会議当日には予備的討論資料として参加者に配布された。会議の登録や抄録の送付、事務連絡はほとんどEメールである。二年前であつたらこれらは不可能であつたらう。途上国はもとより、欧州の研究者でもアドレスを持つ者は少なかったからである。現在は、旧ソ連圏や南米を含む途上国の人々と連絡を取るもつとも確実な方法はEメールである(例外は中国と日本である)。

■おわりに

事務局につきものの苦労、お金集めは予想以上の厳しさであった。アジアや南米の途上国から人を招くことはこの会の趣旨そのものである。しかし昨今の経済状態では一般企業が出し渋るのも無理はない。ビザ問題にも悩まされた。今回は旧ソ連圏からの参加者にトラブルが多かった。公的後援や補助金の獲得、ビザ問題の解決、ブータンやラダックの医師との連絡などは、山岳界の諸先輩の温かい援助がなければ不可能であった。感謝申し上げる。

報告

REPORT
8月

集委員会

若葉会山行・虎毛山

今年は寅年。「虎毛山」に決めたのは集委員会のアイディアか、さすが。

五月二十三日、晴。秋ノ宮山荘へ午後四時の受け付けまでに、マイカー組、電車組、また土曜日とあってか、一山登ってきた人、山の恵みを少し分けてもらってきた人など、三々五々集合する。

温泉に入り、大広間でくつろいでいると、宮城支部の皆さんが、ウイスキーと山ウドの刺し身を出してくださる。しばらくして今度は海鞘の生造りが出てビックリ。東京の一杯飲み屋で出る「ホヤ」とはまったく違ううまさ。夕食時、明日の山行説明があり、二次会は早々にお開き。

二十四日、日曜日、曇り。まずは山行日和。電車組はマイクロスバスで

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

マイカー組といっしょに登山口へ向かう。車を降りてしばらくは赤倉沢林道を歩く。山道に入るとおいしい清水があった。徒渉点では橋が架かっていたので難なく渡れる。すぐに登りとなり、けっこう急登で汗が出る。ブナ林の中の傾斜は雨でも降ったら下りは要注意だろう。

分岐点、一二三四メートルに着き、やれやれ一息つく。ちょっと広くなっているところで、山桜、ツツジ、谷ウツギ、名前も知らない白い花も咲いている。頂上がドーム型に見上げられる。木々が低くなって草原になると、すぐ立派な避難小屋の前に出て、そこが虎毛山、一四三二メートルの頂上であった。風が気持ちよい。小屋の前は湿原で池塘がいくつもあり、無数のモウセンゴケが咲き、池には蛙の卵が揺れている。

山頂では先行していた宮城支部の会員により山菜の天ぷらが次々とで

きあがる。コシアブラ、舞茸、山ウド。フウフウいいながら食べ、集委員会が背負いあげてくれた缶ビールで口を冷やす。栗駒山がうっすらと見え、沢には少しばかりの雪が残っている。

風が出て少し肌寒くなってきたので下山となる。下りながら「コシアブラ」をほんの少し土産とする。分岐点からの下り、とくにブナ林の緑が目染みる。林道で全員合流して秋ノ宮山荘へ向かう。山荘で温泉に入る人、ビールで登頂を祝う人……ここで解散となる。

私は宮城支部会員の車に乗せていただき仙台に向かう。途中から雨、山で降られなくてよかった。

虎毛山は大きくはないが、急登あり、池塘、緑、花もある変化に富んだ楽しい山登りであった。

この若葉会山行は各支部の協力なしに計画することはできないであろう。私も二十回くらい参加しているが、その都度、大変お世話になっていると、つくづく感じている。一参加者として各支部の方々のご尽力にお礼申し上げる。また集委員の皆さんも、計画を立て、偵察や支部との連絡等々苦勞も多いことと思うが、二十数回続いている伝統のある若葉会山行を、末永く続けられるようお願いしたい。私も体力が続く限り、

皆さんの迷惑にならないように参加させていたただきたいと思っている。ありがとうございます。(長嶋正浩)

三水会・初の海外登山

韓国の雪岳山

韓国の山、とくに雪岳山(ソルサン)に行こうと三水会の例会のたびに話が弾んでいた。メンバーもほぼ固まり、機が熟して、九七年十一月、「雪岳山へ行こう」として、会員を募集した。十五名限定、四泊五日。内雪岳・水廉洞(テリョガン)に登り、千仏洞(チッブドゥン)溪谷を下降して、外雪岳(ウソックラ)に出る計画である。

期日は日照時間を考慮して、紅葉期をやめ、入山禁止期間があける初日にぶつけることにした。担当は乾能尚、石田稔郎の二名である。参加者は、たちまち定員オーバーして二十一名となった。

五月三十一日晴。金浦空港着十二時。手配したバスに、ソウルの山岳会明智会員三名を加え、二十四名で出発した。ソウルのホテルに一部の荷を預け、四四号線を北上。竜岱里(ヨンドンリ)の国立公園統制所着が遅く、百潭寺(ベクトムン)の寺バスに乗る。結果的に歩かずに済んだ。

寺入り口で下車し、百潭山(ベクトムン)まで

自然学研究会

やま学研活動報告

- ◆ 6月6日 蔵前工業会館にて山の自然学講座100回記念講演会。
講師・小野有五会員
演題・山の自然から人は何を学ぶか
参加者・約70名
- ◆ 6月13日 環境パートナーシップオフィス会議室にて11時から17時、101回山の自然学講座。
講師・大場達之氏
演題・世界の高山植物
参加者・約60名
- ◆ 6月20日 富士宝永山にて山の自然学現地講座を開催。
講師・増田先生と修士の学生2人、および小泉先生とその学生。
内容・植生の発生過程を懇切に解説、素晴らしい講座だった。
参加者・50名

五分ほど歩く。玉石を積んだ建物で感じがよい。暗い夕食中に、Tさんが「大山レンゲ（山木蓮）」の白い花を見つけた。電灯のない二階の大部屋で寝た。

初代管理人尹氏は三年前に亡くなり、今は若い金氏である。

六月一日晴。朝食前に百潭寺に参詣した。この寺と、鳳頂庵に参詣するご婦人が多い。八時出発。樹林の中の平坦な道は、時々川畔に出て溪谷道となる。読経の音が聞こえる永矢庵を経て、十時三十分水廉洞山荘。左に五歳庵への道が分かれる。右の水廉洞溪谷の道は鉄板の階段と鉄橋が多い。流水は澄み渡り、深い潭（瀬）と滝が次々に現れる。左岸の白雲洞溪谷の付近で、右岸の竜牙長城稜の岩峰を見上げたとき、太陽を

光の環が囲んでいた。双瀑の次にチヨンボン谷が見える。すばらしい滝が連続している。大山レンゲの群落があり、溪谷が伏流になる。急斜面の道となり、熟年にはこたえる。峠を出て、さらに先に鳳頂庵があった。この寺の後背部に五つの岩峰がある。また、三十分ほど登ると、今宵の宿泊地小青山山荘である。宿泊棟の正面は恐竜稜線、太白山脈と続き、北の金剛山まで山々が連なっている。眺望絶景だ。水場は二五〇メートル下にあったが、水を運び、湯を沸かして、夕食はカレーライスである。夜は電灯が点り、オンドルに火が入り、暑いほどであった。百潭山荘は水洗トイレだったが、ここはソーラーシステムである。

六月二日雨。五時起床。朝食中に

雨がポツリと落ちてきたので、急いで出発した。二十分で小青峰の稜線に出た。雨が激しく降ってきたが、荷物を置いて空身で頂上へ。中青峰を左に巻いて、改築された中青山荘を見て、最高峰の大青峰に登った。一瞬雨が止み、霧も晴れた。小青峰に戻り、喜雲閣山荘に向かって下る。この尾根は岩稜がところどころにある、台風のような風雨に苦労した。

長い鉄の階段を下り、山荘に着き、樹林帯の道を歩き、時折見える大岩壁の下（ムノミコゲ）を右に下り、急斜面の道と鉄板の階段、鉄橋を歩き、千仏洞溪谷に出ると水勢が激しい。陽瀑山荘、鬼面岩を過ぎ、鉄橋を渡って飛仙台山荘に入る。ここで山道は終わる。

さらに新興寺まで歩き、タクシーと市内バスを利用してホテル雪岳パークに到着した。シャワーを浴び、着替えをして、十九時に東草海岸の雪岳亭に行き夕食。ひらめの刺し身をとおり、明智会の方に感謝を申し上げ、無事完登を祝して乾杯した。

六月三日雨。ソウルへの航空便が飛ばず、東草の高速バスターミナルに行き、東ソウル行きの優等バスに乗る。四時間二十分で到着。地下鉄で忠武路のホテルへ。十六時ころショッピングに出かけ、登山用品とキムチを購入。十八時、迎えの車で高

級料亭に行き、打ち上げパーティー。六月四日曇。十一時のKEで帰国。今回は溪谷美と美しく咲く花々を楽しんだが、メンバーシップのよい方が多く、明智会の高さん、金さんの活躍があつて成功した。会費も安く上がった。（石田稔郎）

初の海外登山は大成功

一九八二年に折井健一さんの音頭で、三水会ヒマラヤトレッキング隊という名称でネパールへ旅立っているが、これは旅行業者が「手配旅行」を成立させるための名称であった。今回の会員自身による会員に呼びかけたオリジナル海外山歩き隊は、まさしく三水会初のものである。

私は七十七歳で、七十代四名、六十代七名、五十代九名、四十代一名の隊で、老年順位は二番であった。道中のリーダーシップは見事なもので、激しい風雨の中、安全に山麓の宿舎に元気に到着できた。

三水会は日本山岳会の同好会のひとつだが、行動の規範を、計画の先達が十二分にそなえ、参加者全員整然と行動し、安全、確実、和気あいあい、三水会初の「遠征」を完結することができた。実に嬉しく、またありがたいことであった。（錦織保清）



チョモランマを背景に、ロンブック僧院にて

岐阜支部 チョモランマ・BC探訪

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

高木崎男隊長以下九名は、平成十年四月二十八日から五月十一日にかけて、中国チベット自治区からチョモランマ・ベースキャンプ（北稜ルート）を探訪し、第一キャンプ直下のロンブック氷河の出合い、標高約五五〇〇メートル地点へ登山した。そして、中国、ネパールの山岳関係者と懇談し、友好と親善を深めた。

一行は、四月二十八日名古屋空港を立ち、上海、成都を経て四月三十日、チベット自治区ラサ空港へ降り立った。

当日、チベット自治区登山協会から、ラサ・ヒマヤホテルでの友好懇親会に招かれて出席。同協会常務副主席（中国登山協会副主席）洛桑達瓦氏、同協会秘書長高謀興氏、チベット国際体育旅游公司普美旺久氏らと懇親し、両国の登山活動の近況を語り合って友好を深めた。

ラサ市は標高三六〇〇メートルにある。高度順応のため二日間滞在し、ラサ市街地西方の花瓶峰（ブンブ・リ）の標高約四〇七〇メートル地点まで登った。ラサ市からは四輪駆動車に分乗して砂利道を走行した。カンパラ峠やチベット三大聖湖の一つヤムドクツォ湖を通り、シガツェ（泊）へ。さらに、ツォー



チョモランマのベースキャンプ村

ラ峠、カツォーラ峠などを越えてシガールへ。

シガールでも高度順応のため一日滞在し、シガール集落東方の標高約五〇〇〇メートルの無名峰へ登った。日本を出発してから九日目、パンラ峠を越えて、ようやくにして標高五一五〇メートルのチョモランマBCへ無事到着。BCは、ロンブック上流の広大な河川敷の右岸の一角に常設されていた。

当日は快晴に恵まれ、車で登ってきたパンラ峠からは、ギャチュンカン、チョーオユー、チョモランマ、

マカルーなど大パノラマを望むことができた。

BCでの初日、夜間テントが風でバタバタしていた。昨日の昼間は三〇度近くの気温があったにもかかわらず、朝起きてみるとあたり一面うっすらと雪化粧していた。

ロンブック氷河の出合いへBCを九時に出発。水量のほとんどない河川敷をチョモランマを前方に見ながら上流へと進んだ。三時間余りかけ、十二時ちょうどに標高五五〇〇メートルのチョモランマ北稜ルート第一キャンプ直下のロンブック氷河の出合いに立った。今回の探訪最終目的地である。お茶で乾杯し、喜びを共に称えあった。

五月八日BCを立ち、シガール、ニエラム、ザンムー（泊）を経て国境を越え、ネパールの首都カトマンズへ九日の午後に着いた。

同夜、ネパール山岳協会から、ネパールキッチンパンチャガルでの友好懇親会に招かれた。そして、ネパール山岳協会会長ソナム・ギャルツェン・シェルパ（Sonam Gyaltchen Sherpa）氏、同副会長ミン・ドルジェ・シェルパ（Mingma Dorjee Sherpa）氏、同事務局長アン・カルマン・エルパ（Ang Karma Sherpa）氏らと懇親した。

会長さんから「日本山岳会岐阜支

海外の山

ジネット・ハリソンの
8000m 計画

江本嘉伸

ペルー、ネパール、カラコルムへの高所調査隊に何度も参加している。

英国のヒマラヤン・キングダム社が組織した国際公募隊のメンバーとして一九九三年十月七日、念願のエベレスト登頂を果たした彼女は、この時生涯のパートナーとなるアメリカ人ゲアリー・プフィスターラーと知り合い、以後マサチューセッツに拠点を移して医療と登山活動を続けてきた。

世界第三位の高峰、カンチェンジュンガ(八五八六メートル)の頂にまだ一人も女性が登っていなかったとは、うかつにも気づかなかった。エベレストには四十三人、第二のK2にも五人の女性が登っている。ポーランドの生んだ「最強の女性ヒマラヤニスト」ワンダ・ルトケビッチがとうに「ビッグ3」は片づけていたと鑑賞していたが、彼女は九二年五月、そのカンチの頂上を目前にして、帰らぬ人となったのだ。

今年五月十八日、医師であり登山家の英国女性、ジネット・ハリソン(三八)が、ついに最初の女性登頂者となった。英、米、カナダ混成隊のメンバーとして、三人の男性隊員とともに登ったのである。

十五歳で登山をはじめたハリソンは、医師となった後、もっぱら高所や遠隔地での医療に尽くしてきた。マッキンリー、アコンカグアはじめ、

一メートル五七センチと小柄ながらクライミング、カヌー、スキー、サイクリングで鍛えた強靱な身体は、次々に新しい挑戦に駆り立てた。エベレストの経験を活かして、高所における心理学と医療をテーマに博士論文を書いたハリソンは、以後エルブルース、キリマンジャロ、ビンソンマシフと、各大陸の最高峰にも登り、目標レベルを高めてゆく。九七年には二つ目の八千メートル峰のチョー・オユーにも登っている。

今秋はシシャパンマに向かうが、今回のカンチの成功を一つのステッブとして、ハリソンはパートナーとともにK2以下他のジャイアントにも足をのぞくそう、と考えている。そのための手段として、自分たちの隊を組織することにした。そして、「八千メートル峰に登りたいが、自分で

は隊を組織できない登山家たち」にも経費を分かち合う形で「協力登山」を呼びかけている。たとえば九九年春に予定しているマカルーと同年秋のダウラギリならば六千二百五十ドル、二〇〇〇年夏のK2なら一万ドル、という具合だ。すでにアメリカ、イギリスの登山誌などでは広告済みだが、日本の登山界からもぜひ参加を募りたい、という。

九五年六月に東京で開かれた「エヴェレスト女性登頂者サミット」に参加のため来日したハリソンは、控え目な闘志を秘めたドクターの印象だった。高所登山に向けた体質と精神を備えていることは、登山中は「登頂当日を除いて一日十二時間眠る」と言っていたことからわかった。「もっともっと沢山の山に登ってみたい。今は信頼できるパートナーがいるので、それが可能と思う」と話していたが、その闘志と可能性が、今やフルに動き出したようだ。

ハリソンたちのやろうとしていることは、一種の「公募登山」といえるが、登らせてあげる式の商業登山隊ではない。登りたい者たちが独自のペースで自分たちの八千メートルを実行するための新しいやり方と言えるだろう。

部の皆さんにお会いできて嬉しいです。日本とネパールは友好関係にあり、今後も仲良く協力していきたい。日本山岳会から、ポカラのネパール山岳博物館建設資金のご支援をいただいております、ありがとうございます。ネパールは、山も空も花も心も皆きれいです。こうしたネパールヒマラヤの素晴らしさや、魅力などを心に止めていただいて、再びネパールを訪ねくださるようお待ちしております」と、挨拶をいただき、両国の登山の近況を語り合った。

こうしてチョモランマBC探訪と登山の旅を無事に終え、翌日バンコック経由で帰国した。(清水芳彦)

ヒマラヤ・トレッキング特設説明会 各会場 18:30~20:30

- 東京●9/10(木) 退職金機構ホール(JR浜松町駅、地下鉄都立門駅下車)
名古屋●9/8(火) 名古屋国際センター3F第一研修室
大阪●9/3(木) ミズノ本社B1ネクスステージ(中津駅、トレードセンター前駅下車)
福岡●9/8(火) JTキャビンホール(中央区大名)
札幌●9/8(火) リンゆうホール(東区北9条東2丁目)

●会場までの道順はアルパインツアー各営業所へおたずね下さい。

運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員



アルパインツアーズ株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

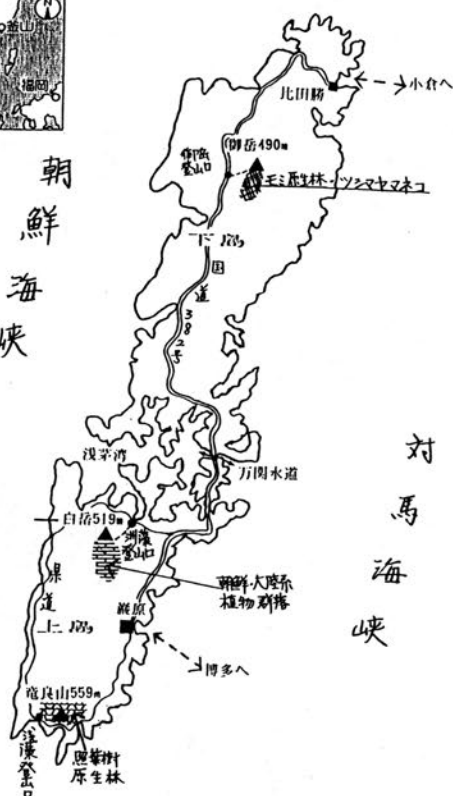
大阪●06(444)3033 名古屋●052(581)3211 福岡●092(715)1557

福岡支部

国境の島・対馬の名峰三山 たてら しら み 竜良山・白岳・御岳



朝鮮
海峡



対馬
海峡

韓国と朝鮮海峡を隔ててわずか五〇キロメートル、国境の島・対馬は豊かな自然が手つかず残る山また山の島だ。数ある山の中でこの三山は、とくに優れた動植物が見られる地域であり、国の天然記念物に指定されているほど。

上島の南部にそびえる竜良山（五五九メートル）は、太古から島に存在していたであろうスダシイなどの照葉樹の原生林に被われ、上島中部の白岳（五一九メートル）は、白い石英斑岩

の岩峰がそそり立つ韓国が遠望でき、朝鮮大陸系植物の宝庫として名高い。下島の御岳（四九〇メートル）は、日本のモミ分布西限となる深い原生林にツシマヤマメコ・オジロワシなどの貴重な野生動物がすむ山として知られている。

これら三山は昔から地元の人々が信仰で登った山だけに、静かで神秘的な雰囲気をかもし、国境の山のみが持つロマンと大自

1	コースタイム	〈竜良山〉 厳原―バス60分―浅藻登山口―1時間30分―木櫛山―1時間30分―竜良山 〈白 岳〉 厳原―バス50分―洲藻登山口―3時間20分―白岳 〈御 岳〉 比田勝―バス40分―御岳登山口―2時間―御岳（雄岳）
2	記 録	
3	地 図	国土地理院(1/25000地形図) 竜良山:「豆殻」 白岳:「阿連」 御岳:「琴」・「鹿見」
4	交 通	〈竜良山・白岳〉 博多港(フェリー・ジェットホイール) 厳原港へ、バスで登山口に。 〈御岳〉 小倉浅野港(フェリー) 比田勝港へ、バスで登山口に。 (九州郵船TEL・092-281-0831/対馬交通バスTEL・09205-2-1810)
5	付近の観光地	竜良山・白岳の登山基地となる厳原は古い城下町。市街地には武家屋敷や藩主菩提寺万松院、秀吉の朝鮮出兵に築城した清水山城跡など旧跡が多い。御岳の登山基地となる比田勝には近くに韓国展望台がある。双方とも魚の郷土料理が美味しい。 (対馬観光協会TEL・09205-2-1566)
6	そ の 他	船に弱い人や渡船時間の惜しい方には、福岡と長崎空港からANKが就航しており、30～40分で対馬空港に着く。島内バスは便数が少ないので、マイカーを航送するか、レンタカーを借りると便利で時間の節約ができる。 (ANK予約TEL・0120-029-222/ジャパレンTEL・09205-4-2220)
7	参 考 図 書	『分県登山ガイド41・長崎県の山』(山と溪谷社刊) 『九州百名山』(山と溪谷社刊) 『長崎県の生物』(長崎県生物学会刊) 『対馬の花』(葦書房刊)
8	問 い 合 わ せ	井上 晋(会員番号12540)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

山書の重み

北村武彦

私には男ばかり三人の子どもがいる。幸か不幸かいずれも山には関心がない。息子たちに言わせると、「親父は山ばかり登っていて、子どもを全然構わなかったではないか。スキーだって一度も連れていってくれなかったではないか。それでは親父の感化を受けて、山が好きになれるわけがないではないか」とのことだ。

いつか息子たちが実家に集まり私と飲んだとき、私の収集品が話題になった。私にはやたらと物を集めたり、古い物を捨てずに取っておく癖がある。多少形を成したものに、郵便切手・山書・落語のレコードと文献がある。

郵便切手は、長男が引き継ぐとい

う。落語は、これまた三人とも興味がなないので、誰も欲しがらない。問題は、山書である。

「親父、あんなに重くて場所ふさぎの山の本、どうする気なんだ」と、三人とも口をそろえて私を詰問する。

その山書は、私が日本山岳会に入会(昭和二十七年)した頃から集め出したもので、当時の先輩に啓発されるところ大であった。以来、がむしゃらに集めて陋屋を占拠し、あげくは、耐火構造の専用書庫を建てる羽目となった。それでも収まりきれず、応接間、自分の部屋、旧宅にも散在する始末となった。

ところがその大量の山書が、まったくの未整理なのである。山に登るのが忙しくて、分類整理する時間かなかったのだ。それでも何かものを書くととき必要に応じて、書架に取り

付き、平積み山の山をくずして目的の本を探し出すひとときは、まさに至福である。

死蔵といえる管理状態ではあるが、先年、これを公共のお役に立てる機会があった。山梨県立文学館が催した「旅の文学―山梨の自然と人」の企画展に、私の蔵書が展示されたのであった。もっともこれは、知り合の学芸課員から協力を要請されただけのことだったが。

息子たちに詰問されたこともあって、最近、山書の処分を真剣に考えるようになった。愚案が三つほど浮かんだ。

ひとつは、理想的には自分で山岳図書館をつくって公開することだが、夢想である。

次は、地元の市の生涯学習推進協議会長を仰せつかったこともあって、市立図書館に寄付することだが、欲を言えば、山岳文庫の特設コーナーをつくってもらいたい。

最後は、一括して古本屋に売り払うことだ。本は、本来、それを真に欲する人に渡るべきものと考えているので、この方法が愛する山書にとってもっとも幸せであるかもしれない。

仮に生前に処分するとしても、創刊号以下の『山岳』だけは、日本山岳会に限りなく執着する一人として

(ああ、私も山梨支部では五番目の古参になってしまった)、死ぬまで手元に止め置きたいと思っている。

「樹林の山旅」再考

浅野孝一

会報六三七号で山本健一郎氏が問題にしている本を書いたのは私である。

私は先人の業績を尊重し、その著作に多くを教えられ、敬意を表することにおいて、人後に落ちるものではない。たまたま私のものが山本氏の目にとまったのだろうが、同じ書名の本ということで、ひとこと説明させていただく。

小林義正氏の名著『山と書物』には、「同名異本考」という文があるが(『続・山と書物』所収)、同名異本の例を思いつくままにあげてみる。朝 史門『山と漂泊』昭和十五年、明文堂刊。

谷川徹三『山と漂泊』昭和三十三年、明文堂刊。

高畑棟材『山を行く』昭和五年、明文堂刊。

風見武秀『山を行く』昭和三十二年、明文堂刊。

尾崎喜八『山の絵本』昭和十年、明文堂刊。

畦地梅太郎『山の絵本』昭和三十一年、日本愛書会刊。

吉田 博、白旗史朗『山の絵本』昭和五十三年、講談社刊。

きりがなから打ち切るが、そのほかに、著者も書名も同じで内容が違ふもの、著者は同じで書名は違ふが中身は同じものなどもある。書名が同じになるのには、小林義正氏の言われるとおり、さまざま、それぞれに個別の理由があると思う。山

俳句

六月 針ノ木雪溪をゆく

西山秀夫

深山が似合ふキヌガサソウの花

万緑の中レリーフの慎太郎(大沢小屋)

雪溪の岸辺にシラネアオイ咲く

老鶯や雪溪は濃き霧の中

山頂ゆ黒部湖を見し梅雨晴間

芽吹見し梅雨の針ノ木峠かな

明易しテントの中はまどろめず

山清水往きも帰りも立ち寄りし

本氏の言い分だと、先にあげたそれぞれ二番目以降の高名な方々も「恥知らず」で「盗んだ」と言われてしまふのだろうか。私は、「あとがき」で断りを入れておいたが、それが汲み取られていないのは残念である。いづれにしても、「中は読まずに」「頭に血が上った」ような状態で、糧当ではない言葉をつかって論じるようなことはしないでいただきたいとお願ひする。

散文的レポート 赤シャツ土曜会新発足

神谷恭平

六月十三日、市ヶ谷駅からルームへの道の街路樹、夏つばきの白い花を愛でながら、私はゆっくり歩む。今日は「山」四月号で呼びかけた会の新スタートの日だ。

梅雨のさなかだからやむを得ないが、できれば晴れ間に恵まれ、一人でも多く集まって、と念じていたがそうもいかず、降りみ降らずみの空模様模様の四番町の坂道を、私は腰痛に耐えながら歩いた。

ひとりふたりと集まる皆さんのお相手をしながら一喜一憂していたが結果は十四人、旧会員九人、新人五人であった。会員総数の三分の一で

ある。

自己紹介、乾杯から談論風発、有益な意見から、空くじなしの「粗品くじ」まで飛び出して、和やかに十六時散会。物足りない方もおられたと思うが、どうやらスタートは順調、どうか当日不参加の方も、これから会の運営にご協力ください。

帰途、駅まではやはり小ぬか雨だった、会の前途を物語るかのよう、空は明るく、私の足取りも軽かった。

高山植物盗掘のプロも登場

市川義輝

「財団法人自然保護助成基金」の支援で、九月二十三日(祝)東京・お茶の水の全電通ホールで「シンポジウム 絶滅から救おう! 高山植物―保護と盗掘防止を考える」が開かれる。主催は日本山岳会と「北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会」である。東京でこのシンポジウムがもたれるきっかけは、小野有五会員らが三月に札幌で開催した「高山植物保護と盗掘防止のための全道シンポジウム」であった。

さて、東京集会の運営は主に当会の自然保護委員会があたることになり、プログラム決定、後援依頼、ポ

スター、チラシの制作とスケジュールが進行中だが、高山植物を永く後世に伝えていく必要性を訴え、最後に大会アピールを採択して「めでたし、めでたし」で閉幕させたくなはないと思う。

札幌での熱気をさらに形あるものにする道筋を東京集会では提示したいものと考えている。たとえば「高山植物盗掘防止法」といった法整備を目指すのも一つのあり方かもしれない。

そうした要素をも秘めた集会であってみれば、どうしても登場してほしい方がいる。それは高山植物盗掘のプロたちと彼らの顧客、愛好家である。幸い盗掘プロのA氏が当日は登場してくれる予定である。A氏はスイスやチロル方面へも出向き、アルプスでは乱れ咲く高山植物を放牧中の牛がムシャムシャと食べているが、すぐまた生えてくると恬淡と話してくる悪党である。

A氏によると、勤務中は「今度こそ捕縛されるのでは」という緊張が走るそうだが、熱心な山野草ファンから受ける報酬のこと、捕まってもたかが二十万円の罰金ですむという心の支えもあって、仕事に精を出してしまふという。

「山と溪谷」岳人の五月号に札幌集会の記事が掲載されている。「山

「溪」に寄稿した自然保護助成基金の岡本氏によれば、北海道ではヤクザまで盗掘に乗り出している実態を、フロアーから道警察署員が証言してくれたそうである。九月のシンポジウムに多くの会員のご来場を切にお願いしたい。

福田宏年さんを語る会

中村太郎

元日本山岳会会員、古いヒマラヤクラブのメンバーであった、福田宏年さんが急逝されて一年が経った。一九九七年六月八日、日曜日、夫人が、母堂の見舞いのため京都に行かれて留守の時に亡くなられた。享年六十九歳。中央大学教授であった。宏年さんの死が発見されたのは、翌日九日のことであった。死因は蜘蛛膜下出血。亡くなってから丸一日、居間の椅子に腰掛けたままの姿勢だったそうだから、静かにかつ急激な死が訪れたのであろう。

六月八日の命日に集英社から遺著『時が紡ぐ幻』が上梓された。佐伯彰一、平山信義、近藤信行、藤原一晃、松本道介の諸氏が発起人となっていて、「宏年さんの思い出を語る会」が如水会館で開かれた。前半は文芸評論家福田宏年像が、後半は情緒的

に眺めた福田宏年像が、こもこも語られた。

私は、立教大学で十年間体育会山岳部長を務められた宏年さんを偲んで話をしたが、ここでは、宏年さんの胸の底にあったであろう、重い部分に触れて書いておく。

宏年さんは、相当な大部である『時が紡ぐ幻』に「近代芸術観批判」にこと寄せて、自ら遺書を公表されたように思えてならない。心の中に澱のようにわだかまっていた重いものを、一息に開陳されたのではないか。

宏年さんは、山岳部長の時、二つの遭難事件に遭われる。五月の谷川岳マチガ沢でブロック雪崩で亡くなった若いOBの滝口義弘君。冬山合宿で涸沢岳西尾根からチビ谷に滑落死した磯井文雄君、本間耕一君である。両君の遺体は雪解けまで収容できなかった。遺族の一人から「先生、こんなにまでして、どうして山に登るのですか。私にはわかりません」。宏年さんは「はあ……」と言ったきりであった。後に「なぜ山に登るのかという問いかけが、これほど重く感じたことはなかった」と、述懐している。

宏年さんは一九七〇年の大学紛争で文学部教授会が学生に屈して、カリキュラムを白紙撤回することを潔しとせず、立教大学を去り中央大学

に移られる。中央大学では文学部長、総長候補にもなるが、山岳部長だけは引き受けない。著書の中で「私は今後この学校に代わろうと、もう山岳部長をやる気はない。遭難が嫌だからではない。せめて死ぬまで遭難した学生の部長でありたいし、私の部員の部長でありたいからである」。

「なぜ山に登るのか」について考えることは「人生とは何か」について考えるのに似ているところがある。宏年さんの哲学だったと思う。

宏年さんは、神原達、松方三郎両氏の推薦で日本山岳会に入会され、図書委員をされた時期もあった。私「復帰されたいかがですか」といっても「もういいですよ」と言葉をつまみおられた。私も、そこまでは聴けなかったことがある。宏年さんの心のうちである。あえて推量すれば山登りの係わりの中で、胸の底に重い部分があったのだと思う。

芦生の森を歩く・その三 雨にかすむ幽玄の谷道二つ

鈴木美代

六月二十一日、櫃倉林道終点は雨であった。本降りである。「橋村さん、いい加減にしてヨ」雨男橋村に

あちこちから怨嗟の声があるが、ご本人は「この日がいいと言ったのは斎藤会長なんだから、文句は会長に言ってよ」と涼しい顔だ。当の会長は、本日はご都合で欠席。文句の持ってゆきどころもない。しゃーない、行くか。

第三回「芦生の森を歩く会」はこうして始まった。今回は京都支部、東海支部、それぞれの自然保護委員会の共催で、京都支部からは支部長の酒井氏をはじめ七名、東海支部からは中世古支部長はじめ二十三名の参加である。責任者、京都支部の秋野子弦、東海支部の橋村一豊、両自然保護委員長を中心に、昨夜は民宿もりしげのいろりの周りで大いに盛り上がった。東京から「山と溪谷」の神長氏、横浜から向夫妻、そして秋田から藤原氏など遠来の客も多い。秋野氏や宿の主人の森氏、芦生を世界遺産にする運動を展開しておられる高松氏、そして芦生なめこ生産組合長の井栗氏など、地元在住の京都支部員より、芦生の森の略図を見ながら森の概要や、ダム反対運動の経緯などの説明を聞く。

ちょうど、三日前の京都新聞にこの地域で樹齢三千〜四千年の巨大杉の群生が発見されたとの記事が載ったばかりであった。新聞の切り抜きが廻り、しばしば皆の話題をさらう。

実測したのは十六本、そのまわりにもまだ数十本の巨木がある。今ごろになってこんな発見があるのも森の深さ故だろうと、今日の行程に大いに期待を抱いた。あの時は満天の星だったのに……。

雨具を着、傘をさして出発。緩く登って横山峠を越える。櫃倉谷沿いの歩道に入るといきなり徒渉だ。井栗さんが先頭に立って案内役を務めてくださる。八百種にも及ぶといわれる植物について、井栗さんの説明を聞きながらゆっくり歩く。道はしっかりしているが、沢に沿って右に左に代わる。そのたびにバシバシヤ徒渉していたら、いつしか雨など



雨に洗われた緑深い芦生の森を行く

気にならなくなっていた。

この谷は栃が多い。どの木も天狗のうちのような葉をいっぱい広げている。ミズナラやサワグルミがこれに混じる。普通、沢沿いにミズナラ、その上に栃が生え、尾根の腹から上にブナが生えるのだそうである。栃、ミズナラ、サワグルミそれに桂などは水が好きな木で、と藤原氏。あちこちの水溜まりの上にはモリアオガエルの卵が白い泡に包まれて孵化を待っている。結構高い枝についている卵もあって、親蛙の苦労が偲ばれるが、そうして孵ったオタマジャクシを下で魚が狙っている。自然は厳しい。

魚止の滝を越えるとやがて道が少し急になり、十〜十五分登りののち、突然林道に飛び出す。林道を少し左行し、右手に入り込んでいる山道を十分くらい登ると杉尾峠であった。峠の手前からは日本海が見えるらしい。今日は海こそ見えないが、折り重なる山々が霧にかすんで次第に色を減じる様はまさに日本画の遠山の景色、低山ならではの風情であった。

杉尾峠から由良川源流上谷に沿って下る道は、雨にかすんで幽玄な雰囲気である。「この先はすごい巨木がいっぱいあって、すごいいいよ」橋村氏が嬉しそうに言う。子どもの自慢でもするみたいだ(本当にこの

森が好きなんだな)。しばらく下ると上谷随一の大栃。がっしりとした幹、いっぱい張り広げた枝、木肌に手を触れると「生きているよ」と言っているような弾力が感じられる。少し前まで根元にガマが棲んでいたらしいが、「誰か悪さをしたらしくていなくなっちゃった」と、井栗さんが残念そうに言っていた。

野田畑湿原に沿ってさらに歩く。湿原の向こう、稜線だけ松が生えているあたりには、昔木地師が入っていたそうだが、などという話を聞いているうちにあたりは植林帯となる。枝打ちした杉が並ぶが、どの木にも熊剥ぎの跡があり、たとえ林業が採

算の合うものだとしても、やっぱり状況は厳しいのだろう、と思わせる。やがて午後二時過ぎ、長治谷の作業小屋に出て今日の行程を終えた。

マイクロバスで朝車を置いた須後の駐車場に送っていただく道も、周りは深い森である。車窓から外を眺めながら、ここを訪れるのはこんな雨の日こそふさわしいのかもしれない、とふと思った。

芦生の森の現状や、保護、開発、それぞれの動きについては、前二回の歩く会の報告で詳しく触れられています。今回は、森にも樹木にもまったく素人の一山屋の印象を報告させていただきます。

●新ハイキング選書● ●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中

※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁
川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)
※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13
☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

五十嵐篤雄・著

『飯豊道』

筆者は本会の現役の越後支部長である。名門・下越山岳会会長、その活躍の舞台は東北アルプスの異名を持つ飯豊連峰。期間は筆者の飯豊の初旅、昭和十七年八月から平成五年九月「飯豊登山五十周年」記念登山に至る。この間飯豊の主要な山や沢をくまなく歩き続けた紀行と、貴重なエッセイなど五十篇が収録され、飾らない流麗な文章でつづられ、読む人を引きつけてやまない。

草創期の飯豊の指導標はかすかな鈍目であった。まさに現代とはかけ離れた原始の世界、登山の原点が要求される世界であった。鋸、鈍、油紙、草鞋、飯盒が生活用具、生木の焚き火がでなければ死活につながった。氏は藤島玄氏をはじめよき

先輩、仲間に恵まれ、雪山、沢登り、さまざまな藪こぎをこなし、すばらしい山男へと成長して行く過程も読み取れる。本書は筆者の見事な自分史の一つであるとともに、飯豊をめぐる貴重な日本の登山史の一つであると言える。

(小倉 厚)

一九九八年四月 (株)恒文社発行
四〇二ページ 二千八百円

ジェフ・ロウ・著
手塚勲・訳 船尾修・監修

『アイス・ワールド』

庇状にオーバーハンクした岩から垂れ下がる氷柱を、さながら5・13のフリークライミングを行うかのようなムーブで、ダブルアックスにアイゼンで攀るジェフ・ロウの写真が雑誌『岩と雪』の表紙を飾った時、衝撃を受けたクライマーも多かったのではなからうか。

本書には、アイスクライミングの歴史から始まり、ロマンあふれる登攀記、そして装備と技術における最新の基礎知識が、ふんだんに挿入された美しい写真とともに惜し気もなく紹介され、さらには世界の名だたるアイス・ルートがルート図とグレート付きで巻末に紹介されている。『岩と雪』の終刊以降、クライミングの最新情報、海外情報が得にくく

なっている日本の状況だが、本書では私は久しぶりに世界最先端のクライミング世界に触れた気がし、またそのレベルの高さに感心させられた。アイスクライマーのみならず、アルパイン・クライミングを志す者には必読の書といえよう。

(松原尚之)

一九九八年二月 山と溪谷社発行
二五五ページ 二千八百円

土岐田正勝・岸昌一・神田より子
斉藤壽胤・共著

『鳥海山』

鳥海山(二三三六メートル)は出羽、秋田富士ともいわれ、山頂は山形県飽海郡遊佐町鳥海山一番地、山頂付近を除いて山稜が山形・秋田両県境になり、複合型の成層火山(コニード)である。独立峰で、山裾を日本海に没し、眺める位置によって山容が変わる「日本百名山」の一つである。

本書は鳥海山を御神体とする大物忌神社の山頂御本殿、式年遷座奉祝祭斎行(二十年ごと)に合わせて、鳥海山にまつわる研究を続けてこられた各先生方の協力の下に記念誌として発行された。山岳信仰の一拠点として栄えたお山の状況などに詳しい。第一部「鳥海山の自然」を土岐田氏、第二部「鳥海山信仰史」を岸氏、第三部「鳥海山の修験」を神田氏、第四部

「鳥海山の文化」を斉藤氏と分担して記述される学術的な力作である。

鳥海山周辺の各登山口には、近世それぞれ修験集落を形成し、協力して一山を形成することなく、庄内藩、矢島藩を巻き込む山頂争いや、中世羽黒山に所属したが、のち羽州一宮両所山神宮寺を中心とするなど、その歴史は興味尽きない。(三沢 三)

一九九七年十月 鳥海山大物忌神社発行 三九四ページ

新妻喜永・著

『東京付近のんびり
ゆったり山歩記』

この本の「あとがき」によると、著者はこれまで十年ほど撮り続けてきた八ヶ岳に少々の倦意を感じ、そのかわりにと転じたのが、この「低山」だという。以後約一年半、とりわけ好む「奥多摩の山」と「西上州の山」、さらにはやはり東京から近い「おちこちの山」を歩いた三章三十五篇の紀行が一冊の本にまとめられた。新妻さんの「カラー反転の偽もの」ではない「ほんもののモノクローム」の写し出す世界はすでに定評があるが、それに加えて、その文章もまたほかに類がない。今回の山歩は「遊山気分」でカメラは最小限にとどめ、ザックの底にしのはせしたのは、好物の

さんけんだより

新管理人奮闘記
その2

木村太郎・弥生

山研のライフライン飲料水は善六沢から採っている。大雨で濁った水が、敷設した五〇メートルのホース内を流れて建物裏にある三トンの貯水タンクに溜まり、濁り水がそのまま蛇口より出てきた。その日以降も大雨の後に幾度か濁り、そのたびに水源まで行って水を止め、戻ってきでタンクの掃除。内部に溜まった泥や砂をきれいに取除くのは、二人で半日の仕事。都会暮らしでは経験できないことで、山研にきて初めて、

お酒だという。そんな著者のあとについて、こちらものんびりゆったりページを繰っていけば、微笑むにしろ耳が痛いにしろ、思わず「何度も上手い」と膝を打つに違いない。驚くのは新妻さんが写真に写し文章に書くと、並の風景が並でなくなってしまうことである。この本に

でてくる山の幾つかには私も登っているが、いたい自分の目は何を見えたのかと慚愧にたえない。(横山厚夫)
一九九七年六月 実業之日本社発行 二七七ページ 二千元

透明な水が蛇口から出てくるありがたさを実感した。次に頭を抱えたのがゴミ問題。ゴミ処理業者は原則として生ゴミ、缶類のみの有料回収で、旅館などは焼却炉を持ち処理している。山研は可燃、不燃のゴミも何とか業者に引き取ってもらっているが、どこかに埋められているかと思うと心が痛む。利用者にはゴミ持ち帰りをお願いしているが、食品の外箱、ビニール包装などは持ち込まず、ゴミ減量を心がけていたきたい。ここにきて三ヶ月、ハプニングのたびに思うことは、都会の便利さにどっぷり漬かっていたということ。様々な不便さに出くわすたびに、私たち二人は何かに気づかされていくようだ。

図書受入報告 (1998年6月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
主婦の友社(編)	日本百名山とふもとの名湯: 最新らくらくコースガイド	166pp/26cm	主婦の友社	1998	鴨下重彦氏寄贈
西丸震哉	西丸震哉の日本百名山	438pp/20cm	実業之日本社	1998	著者寄贈
ブルーガイド編集部(編)	源流を歩く: 川のロマンを求めて(ブルーガイドハイカーNo.2)	175pp/21cm	実業之日本社	1998	有楽出版社寄贈
岩崎元郎 他	展望を楽しむ100山: 関東近辺(ブルーガイドハイカーNo.1)	215pp/21cm	有楽出版社	1998	著者寄贈
國分誠(編著)	伊豆・城山フリークライミングガイド200	59pp/21cm	國分誠(私家版)	1998	著者寄贈
和田誠一(編)	横浜山岳協会・創立50周年記念誌	133pp/30cm	横浜山岳協会	1998	発行者寄贈
金光康資	防長山野へのいざない(第1集)	270pp/26cm	金光康資(私家版)	1996	著者寄贈
金光康資	防長山野へのいざない(第2集)	314pp/26cm	金光康資(私家版)	1998	著者寄贈
岐阜県自然環境保全連合(編)	御岳山の自然: 世界的な自然遺産	87pp/31cm	岐阜県自然環境保全連合	1998	発行者寄贈
鈴蘭山の会運営委員会(編)	古元一弘君奥沢谷遭難事故報告書: 鈴蘭山の会1997年11月	24pp/26cm	鈴蘭山の会	1997	発行者寄贈
自然公園美化管理財団(編)	自然保護ボランティア活動シンポジウム報告書(平成10年3月)	50pp/30cm	自然公園美化管理財団	1998	発行者寄贈
自然環境研究センター(編)	新・美しい自然公園(第15巻): 上信越高原国立公園「草津」	48pp/34cm	自然公園美化管理財団	1997	発行者寄贈
松本健夫 他	九重の自然と歴史	368pp/19cm	葦書房	1998	出版社寄贈
ジェス旅行センター(編)	草原の国・モンゴル: 旅行のご案内	47pp/22cm	ジェス旅行センター	1998	小川務氏寄贈
北田紘一(編)	日本スキーツアー・ルート集(ザ・コンパス・シリーズ)	157pp/26cm	山と溪谷社	1994	著者寄贈
田部井淳子(編)	エヴェレストの女たち: Women on Everest	286pp/19cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
小泉武栄	山歩きの自然学: 日本の山50座の謎を解く	142pp/22cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
杉本誠(編)	日本アルプス: はるかなる山々の写真(日本語解説書)	28pp/21cm	「日本の山岳写真80年」実行委員会	1998	
Maraini F. & Sugimoto M.	Alpi Giapponesi: Fotografi di Montagne Lontane	156pp/21cm	Museo Nazionale della Montagna	1998	発行者寄贈
Nakawo M. & Hayakawa S.(eds.)	Snow & Ice Science in Hydrology	133pp/26cm	Nagoya University	1998	編者寄贈
Tenderini M. & Shandrick M.	The Duke of the Abruzzi: An Explorer's Life	188pp/24cm	The Mountaineers	1997	購入
Kapadia, Harish(ed.)	The Himalayan Journal (Vol.54, 1998)	306pp/22cm	The Himalayan Club	1998	発行者寄贈
Kielkowski, Jan	K2 and Northern Baltoro Mustagh	116pp/21cm	Explo	1997	著者寄贈

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略)

82名 182口 913,681円(7月4日現在) 累計762名/2137口/10,699,517円

●16口(83,270円)

76ナンダデヴィ隊・84カンチェン
ンジュンガ隊

●10口(50,000円)

中村義

●6口(32,411円)

迫田泰敏氏を励ます会

●6口(30,000円)

久野英子

●5口(25,000円)

西孝子 大石惇

●4口(20,000円)

梅津博 江本嘉伸 石田平

●3口(15,000円)

本田昌司

●2口(10,000円)

山崎幸二 大庭貞江 小松原一
郎 塚崎義人 白根一 小林碧
降旗義道 石田稔郎 伊藤義男
武庫川女子大学鳴松山岳会 立
澤延公 中野和郎 北野忠彦
小浜浩三 大野栄二 近藤有慶
久我良房 本郷三好 松田章
本田誠也 横山宏太郎 鈴木要
三 鶴見敏彦 渡辺洋子 樽木
孝明 平井和雄 千田早苗 石
塚彰 廣瀬貞雄 勝山康雄 川
見博美 吉江光善 土井高夫
西沢健一 中嶋啓 瀧島清 垣
内雄治 安藤久男 阿部勇作

川島新太郎 坂本矩祥 赤井一
隆 山本篤 市村陽典 内田昌
子 熊野将 鈴木一元

●1口(5,000円)

大貫敏史 松方峰雄 本田政一
安藤幸明 久保田優一 西あず
さ 林桂子 愛利三 真田匡三
三浦敬志 太田義一 中條康裕
山下潔 近藤育代 田久保勇治
白木貞次 福樂勲 多野正一
安藤幹 大友繁 田中貢 松村
文子 掛本芳成 津田珠子

●その他口(3,000円)

中美知代

会務報告

六月理事会

日時 六月十日(水) 十八時三十五分
二十時四十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鰐坂、増山、森、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、長尾、中川、中村各常任評議員「委任」大蔵理事、平野常任評議員「大蔵理事はマッキンリー気象観測機器設置登山隊長で現地活動中」

【審議事項】

- 一、青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八の件 宇田川
- ①事故の経過について 谷川隊長仮報告書(「山」六月号掲載予定)
- ②同 留守本部事務局経過報告書 宇田川事務局長
- ③同 事故処理関係日誌 井本重喜 会員記述
- 前記三部提出し、経過説明。
- ④五月二十二・二十九日、椎名家、赤坂家の遺族に同行してネパールに飛び、現地スタッフと事後処理にあたった吉永理事の経過報告。
- ⑤負傷者三名の現況 大森副会長。

⑥告別式・赤坂家／六月三日、椎名家／六月十三日、追悼会／七月十一日

以上の経過説明の後、斎藤会長が「吉報を待ったが、残念な結果となり心配をかけたが、早い対応に感謝する。事故を反省し、今後も若い会員の高所登山の継続を望む」と挨拶。二、秩父宮記念山岳賞 竹内副会長 五月二十八日、運営委員会に先に決定の実施大綱に続く「実施細則」「推薦要項」「推薦書類」「応募要項」を決定。小倉・竹内両副会長が宮内庁へ告知の挨拶。六月九日、事務局会議を経て、本日の審議を受け、直ちに募集活動に入る。各理事も担当委員会、関係団体、学会などへの告知連絡をお願いする。 承認

三、新篇「日本山嶽志」の件 飯田 ナカニシヤ出版より全面協力(資金負担を含む)が決まり、七月下旬に図書委員、岐阜支部で打ち合わせ、九月理事会に百周年記念出版事業とする方向で意見提案の見込み。承認

四、学生部ブータンヒマラヤ登山隊一九九八の件 宮崎

九月二十六日(十一月九日)にわたり、全国九大学から九名+顧問一名、現地ガイド一名の編成で、ブータンヒマラヤ・西ルナナ地方未踏の山々の踏査と未踏峰(ツェンタカン東峰―仮称「六七〇メートル」)の全員登頂を目指す。 承認

五、支部長交代の件

絹川

五月三十日の東海支部総会で支部長が、尾上昇→中世古隆司(会員番号五一七八)に交代した。 承認

六、シンポジウム「絶滅から救おう!高山植物―保護と盗掘防止を考える」を開催する。 自然保護委員会 ①九月二十三日(水)、十時より、於全電通ホール。

②挨拶 斎藤会長、地球環境国際議員連盟(堂本暁子氏を予定)。

③講師 小野有五(北海道大学教授、大場達之(千葉県中央博物館客員研究員)。

④主催 日本山岳会自然保護委員会、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク。

⑤協賛 自然保護助成基金の助成でシンポジウムを計画。 承認

七、後援名義使用の件 絹川 東京都写真美術館より、九月一日(十一月三日開催予定)の写真展「山を愛する写真家たち―日本山岳写真の系譜(仮称)―」展に対し、後援名義使用願いが出された。 承認

八、撮影許可申請の件 絹川 (株)めいかん企画より、旅の情報誌「私の旅」七月号巻頭特集に、本会所有のW・ウエストン関連の写真撮影、掲載許可願いが出された。 承認

九、住所録掲載の件 絹川 (株)日本体育社より、全国体育指導

委員連合機関誌「みんなのスポーツ」七月号特集記事アウトドアスポーツ関連団体住所録掲載に際し、日本山岳会として住所録掲載許可願いが出された。 承認

十、シンポジウム後援依頼 森 九月十九日、十三時三十分開催の「火山ガスを災害防止(仮称)シンポジウム」主催 科学技術庁より、後援依頼があった。後援内容は、当日の受付など(科学委員会委員が応援、会報への案内掲載依頼)。 承認

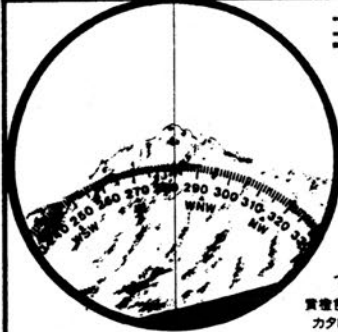
【報告事項】

●総務委員会・絹川

①ウエストン祭は徳本峠越えが四百名を超え、盛会裡に終了。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目僅かですが、そのまますべて正しい方位です。




重量78g.

つや消し黒	¥17,000	送料 ¥ 600
質感色メタリック	¥18,000	消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、郵送でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3526-5411 FAX 03-3526-5411

株式会社 石神井計器製作所

事務局の土曜休日について

— 総務委員会 —

現在、本会ルームは日曜祝日を除き、月曜から土曜日まで6日間開室されています。しかし社会的には週休2日が普通になり、民間企業、役所、学校、銀行なども土曜日は休日となっています。そこで総務委員会では検討の結果、次のように提案します。

1. 10月より月2回、第2、第4土曜日を休日として、ルーム閉室を試行する。
 2. 土曜会、オリエンテーションなどの会務はできる限り第1、第3(第5)土曜日をお願いする。
 3. 会員の閉室に対する不便さへの意見は十分検討する。
- なお、現在ルームの開室時間は、月、火、木、土=10時~20時、水、金=13時~20時です。

②十月三十一日、全国山岳博物館会議開催予定。

議開催予定。

③事務局の土曜日勤務についてデ

タを集め、七月理事会に諮問。

●ネパール・トレッキング・吉永

現在申込者八十名、コース設定、費用は六月十二日頃明確化を図る。

●ポカラ山岳博物館募金・伊丹

六月八日現在、六百八十名、九百七十八万円、「山」六月号に掲載。

●海外委員会・伊丹

連続講座「山」五月号に広報掲載)開催。

①テーマ「もう一つの世紀末」

—日本人とチベットの知られざる交流—

②講師、モンゴル・チベットに造詣

の深い江本嘉伸会員

③第一回・六月十八日

第二回・六月三十日

第三回・七月九日

●医療委員会・増山

第三回登山と高所環境に関する国際医学会議報告。

五月二十一日より二十四日まで松本市を主会場に開催。チベット、キルギスタン、ブータン、ネパール、ボリビア、チリなど高地国、欧米と参加三十二カ国(海外百三十人、国内三百人)、意義ある会議となった。

公開講座では斎藤会長、P・ハケツト氏、田部井淳子氏らの話が多大の感銘を与えた。会議後のツアーにもカンチェンジュンガ事故対応の多忙中にもかかわらず、参加各役員、信濃支部の協力に感謝する。

●パソコン導入検討委員会

会員・会費・会計処理システムの更新に関する報告書(別紙)

●山研運営委員会・坂本

①焼岳登山とウエストン祭(六月六日、青年部と共催 二十三名

参加、ヒマラヤ登山経験の多い松原会員の同行は好評。

②六月七日、環境庁と小倉副会長、森科学委員会担当理事、山研委員で自然エネルギー利用について、研究話し合いが持たれた。

③片山文庫、ケルン文庫の新設。乾燥室の完備。

④自然エネルギー展(八月二日~二十二日開催予定。

■会員異動

物故

塚田和男(六二一) 10・5・12

赤坂謙三(二二七四) 10・5・16

椎名厚史(二二三三) 10・5・16

鈴木敏雄(五七一五) 10・6・6

退会(10・6・30)

長野芳宣(二二〇七九)

稲葉初子(一一〇七九)

大場悠平(一一四九〇)

西沢広三(二二五一八)

水田 廣(七七五〇)

京都山岳会(五四〇六)

終身会員

池田経昭(四三七六)

山本良子(四七〇四)

ルーム日誌

6月

2日	アルパインスケッチクラブ
3日	常務理事会・燦々会 会報編集委員会
4日	学生部 やま学研
5日	フォトビデオクラブ
8日	アルパインスキークラブ 学生部 97同期会
9日	アルパインスケッチクラブ 秩父宮記念山岳賞事務局 95同期会
10日	理事会 93同期会 学生部
11日	95同期会 集委員会
12日	集委員会
15日	総務委員会 資料委員会
16日	フィルムビデオ委員会 燦々会 学生部
17日	三水会 アルパインスキークラブ 学生部 山岳編集委員会
18日	海外連絡委員会(講演会I) 科学委員会 山研委員会
19日	青年部
20日	山げらの会総会
23日	自然保護委員会 アルパインスケッチクラブ 学生部
24日	アルパインスキークラブ
25日	学生部
26日	集委員会 海外連絡委員会 データバンク研究会
27日	山百合の会講演会 学生部
29日	緑爽会 高所研究委員会
30日	海外連絡委員会(講演会II)

6月来室者659名

INFORMATION



◆ビールパーティーへのお誘い

主催二火会

ビールを飲みながら、楽しい一宵を過ごしませんか。申込は不要です。

日時 九月五日(土) 十七時～

会場 日本山岳会集会所

会費 二千五百円

◆科学技術庁主催の「火山ガス災害防止シンポジウム」 科学委員会

昨年の火山ガスによる事故の多発を受けて、国の研究機関が緊急研究を行いました。その成果を踏まえてシンポジウムを開催します。

日時 九月十九日(土) 十四～十七時

会場 法政大学市ヶ谷校舎五八年館

内容①火山ガスについて何がわかったか(緊急研究の成果)・小坂文子

東京工大名誉教授 ②火山ガス事故から身を守るには(研究成果をどう役立てるか)・森武昭(日本山岳会理事)

研究機関の担当者他

申込 ハガキまたはファックスで

千代田区霞ヶ関二二二一

科学技術庁研究開発局防災科学技術推進室 火山ガス災害シンポジウム担当宛

FAX・〇三―三五〇三―八一九九

問合せ 科学委員会・森武昭まで

◆上高地山研フチ・コンサート

山研運営委員会

バイオリンとシンセサイザーによるクラシック音楽会を開催します。

日程 九月二十六日(土)～二十七日(日)

会場 上高地山岳研究所

受付 二十六日十五時

会費 九千六百円(宿泊、夕食、朝食、コンサート参加費など)

申込 九月十日までにハガキで山研運営委員会「コンサート係」へ。先着二十名で締め切り。

問合せ 井野(Tel・〇三―三六四七―三〇七三)まで。事務局、山研への問合せはお断りします。

◆シンポジウム「絶滅から救おう!高山植物―保護と盗掘防止を考える」

日時 九月二十三日(水)十時～十六時

会場 全電通ホール(千代田区神田駿河台三二六 JRお茶の水駅・聖橋口下車)

入場無料(別途資料代)

内容・講演

①北海道の高山植物の現状と保護

講師・小野有五北海道大学教授

②高山植物の特性と保護

講師・大場達之氏(千葉県中央博物

館研究員)

現状報告、パネルディスカッション

「高山植物の保護と盗掘防止」など。

申込 ハガキで自然保護委員会へ。

※このシンポジウムは(財)自然保護助成基金の助成により企画されました。

◆自然観察山行

自然保護委員会

日本三大美林の一つ、赤沢自然休養林(長野県)で開催。地元森林インストラクターが案内します。

日程 十月三日(土)～四日(日)

集合 三日月夕刻 長野県木曾郡上松町・町営ねざめホテル(中央本線上松駅下車一キロ)、宿泊

赤沢まで専用バス、ヒノキ学術研究路(五・五キロ三時間) 木曾福島駅バス帰着十六時頃解散。

費用 一万円(宿泊代、弁当代など)

申込 住所、電話、氏名、性別、年齢、会員番号を明記しハガキで、川越尚子宛

〒一八五―〇〇一

国分寺市本多三三七―三二

※申込者には詳細案内を送付します。

◆きのこ山行「二岐山と小白森山」

集会委員会

南会津の東端、那須連峰と境を接する位置にある双耳峰の二岐山・小白森山に二岐温泉から登ります。

日程 十月十七日(土)～十八日(日)

集合 東北新幹線・新白河駅十時(宿の送迎バスがあります)

宿泊 二岐温泉・大和館

費用 一万二千円程度

申込 氏名、住所、電話番号、会員番号、年齢を明記のうえ必ずハガキで日本山岳会事務局宛お申し込みください。

締切 十月五日

◆第二回山行「山友の山を旅する」

96同期会

全国に散らばっている同期が、自分の気に入っている山を紹介し

日程 十月四日(土)～五日(日)

行先 武奈が岳(比良山系・滋賀県)

費用 一万円程度(宿泊費など、交通費は個人負担)

申込 九月十日までにハガキで96同期会メールボックスへ。

問合せ 飯田邦幸へ

Tel・〇三―三三六八―九六五四(自

〇三―五二二一―〇二一八(勤)

日本山岳会報 山 639 号

1998年(平成10年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社